



海外

k a i g a i

日 本 語

n i h o n g o

第 9 号
2019年12月

教 育

k y o i k u

研 究

k e n k y u

海外日本語教育学会 設立趣意書

日本語教育は世界各地で多様に変化しながら行われています。海外日本語教育学会は、海外の国や地域の日本語教育の歴史や実情をよく知り、学習者に寄り添った日本語教育を追求していきます。また、海外の日本語教育現場が抱えているさまざまな課題について解決策を探り、情報を広く共有するために発信していきます。

海外日本語教育学会は、各国や地域の歴史に根ざした、多様な言語、文化および価値観を尊重します。わたしたちは平和な国際社会の構築につながる日本語教育を追求し、学びあうことによって、日本語教育の現場を中心とした世界各地にその研究成果を還元していくことを目指します。

具体的な活動として、以下の3点を発信し、共有することを柱とします。

- 1) 海外の国や地域に固有の日本語教育の実態調査および研究
- 2) 海外の国や地域の現場で培ってきた教育方法や教室活動の実践報告および研究
- 3) 海外の国や地域の史的背景にもとづく日本語教育のあり方についての研究

世話人：新井克之、荒川友幸、鶴澤威夫、内山聖未、黒田直美、小林基起、近藤正憲、
佐久間勝彦、高嶋幸太、パシユカ、ロマン、三原龍志、村上吉文、谷部弘子、
吉田一彦（五十音順）

現在の学会組織 (*は委員長)

会長：佐久間勝彦

副会長：小林基起

事務局長：高嶋幸太

例会運営委員会：新井克之、荒川友幸、黒田直美*、村上吉文

第1回アフリカ日本語教育会議支援委員会：内山聖未*

【学会誌本号担当】 (*は委員長)

編集委員会：内山聖未、高嶋幸太、吉田一彦*

査読委員会：新井克之、荒川友幸、蟻末淳、黒田直美、小林基起、近藤正憲、佐久間勝彦、
高嶋幸太、中島里美、三原龍志、村上吉文、吉田一彦*

目次

【特集】

これまでの海外日本語教育学会研究例会内容一覧（2016年-2019年）

学会誌編集委員会編.....	01
『海外日本語教育研究』投稿規定・執筆要領.....	08
編集後記.....	12

これまでの海外日本語教育学会研究例会内容一覧

(2016年 - 2019年)

2015(平成27)年度

平成27年度第4回(2016年3月13日)

【報告&討論】

「語学教師が留学して学べること ―グローバル時代における日本語教師像―」

1. 「西欧語学留学で(反面)教師に学ぶ ―グローバル!? だから何?」

発表者1、ファシリテーター: 吉田一彦

「ウズベキスタンに学んで ―語学教師に現地語、教授法習得は必須か?」

発表者2: 入山美保

「日本に複数回来てみて ―グローバルな人になるために留学は必然か?」

発表者3: ロマン・パシュカ

「メキシコの大学院で気づいたこと ―日本留学の用意として日本語を勉強するの?」

発表者4: 新井克之

2. 進行役付きディスカッション

2016(平成 28)年度

平成 28 年度第1回(2016年 6 月 11 日)

1. 意見交換会「さまざまな国の中等教育段階の日本語教育」
 2. 「マレーシアの中等教育段階の日本語教育」
発表者：坪山由美子（青年海外協力隊技術顧問）
-

平成 28 年度第 2 回(2016年 9 月 17 日)

- 「任地とつながり続けよう ―追跡調査の可能性―」第2弾 進行：高嶋幸太
1. 「ニカラグア日本語教育の歴史を探る！
～任地とつながり続けることの意義を求めて～」
発表者：黒田直美（中米：ニカラグア）
 2. 「トンガ人日本語教師の自立支援に関する考察
～日本人ボランティア教師とのダイアリー交換の分析を通して～」
発表者：坂下太一（大洋州：トンガ）
 3. 意見交換
-

平成 28 年度第 3 回(2016年 12 月 10 日)

1. 『相互理解のための日本語』再考 ―ロシアでの事例を中心に―
発表者：荒川友幸氏（元国際交流基金日本語教育専門家）
 2. 実践事例報告と意見交換
進行：佐久間勝彦
パネラー：荒川友幸（ロシア、エジプトなど）
池津丈司（ブラジル、エジプトなど・オンライン参加）
坂下太一（トンガ）
村上吉文（モンゴル、サウジアラビアなど・オンライン参加）
海島健（バハレーン・オンライン参加）
-

平成28年度第4回(2017年3月11日)

「非母語話者日本語教師とはどのような人たちなのか」進行：新井克之

1. 「非母語話者日本語教師とはどんな人たちなのか
—スリランカ人日本語教師へのインタビューから—」
発表者：高田麻由
 2. 「非母語話者日本語教師とはどのような人たちなのか
—グアテマラ人日本語教師へのインタビューから—」
発表者：新井克之
 3. 意見交換
-

2017(平成 29)年度

平成 29 年度第 1 回(2017 年 6 月 17 日)

1. 「中米・カリブ日本語教育ネットワーク構築と持続の試み」

発表者：(1)大嶺恵美 (元 JICA 青年海外協力隊、元国際交流基金日本語専門家)

(2)玉村香奈 (元 JICA 青年海外協力隊)

(3)オンライン参加のコメンテーター

(同ネットワークセミナー開催実行委員経験者)

コスタリカ：篠原麗奈、オスカル・グラナドス

ニカラグア：ベヒシュタイン玲子、ランドル・メザ

エルサルバドル：アントニア・リバス

2. 「広域ネットワークの構築の意義と課題 —東アフリカ及び中米カリブを例に—」

発表者：蟻末淳 現国際交流基金日本語専門家 (メキシコ)、

元国際交流基金日本語専門家 (ケニア)

平成 29 年度第 2 回(2017 年 9 月 16 日)

「モロッコの日本語教育 —『学習者コミュニティ』に注目して」

発表者：小林裕美 (元 JICA 青年海外協力隊、元 JICA シニア海外ボランティア)

平成 29 年度第 3 回(2017 年 12 月 16 日)

1. 「タンザニア、セネガル、スーダンにおける日本語教育」

発表者：内山聖未 (元 JICA 青年海外協力隊)

2. 進行：荒川友幸

「アフリカ諸国における日本語教育の現状と課題」

基調報告：内山聖未 (元 JICA 青年海外協力隊)

平成29年度第4回(2018年3月17日)

「日本語の漢字力評価の方法に関する研究」

共催：科学研究費補助金・基盤研究B（研究代表者：加納千恵子）

1. 本テーマ趣旨説明（谷部弘子）
 2. 多言語クラスの学習者間のインタラクションから何が生まれるか（小林基起）
 3. 非漢字圏・非アルファベット圏の学習者・使用者の立場から（1）
発表者：ハフィーズ ウル レーマン（鹿児島大学助教）
[パキスタン・ウルドゥー語・理工系]
 4. 非漢字圏の学習者・使用者の立場から（2）
発表者：フランシス イヴァン カンボス チンチア（元鹿児島大学非常勤講師）
[コロンビア・スペイン語・医学系]
 5. ディスカッション
-

2018(平成30)年度

平成30年度第1回 (2018年6月9日)

1. 「ロシアの中等教育における日本語教育」
発表者：荒川友幸 (元国際交流基金日本語教育専門家)
荒川オクサナ (元国立モスクワ言語学校教諭)
 2. 「教室から世界へ ～ロシア編～」
発表者：鶴澤威夫 (ウラル連邦大学)
-

平成30年度第2回 (2018年10月6日)

進行：三原龍志、近藤正憲

1. 「南米日系社会における継承日本語教育」
発表者：坂本麻子 (元日系社会シニアボランティア)
 2. 質疑応答、意見交換
-

平成30年度第3回 (2019年2月9日)

1. 進行：荒川友幸
「中国人日本語学習者における日本語漢字の誤りについての研究
—漢字の字形を中心に—」
発表者：劉哲 (広島大学大学院文学研究科総合人間学博士課程)
 2. 進行：新井克之
「外国人労働者の受け入れに対して、いま日本語教育関係者が知るべきこと
—インドの技能実習生送り出し機関の実態をふまえて—」
発表者：氏家雄太 (元 JICA 青年海外協力隊)
-

2019(令和元)年度

令和元年度第1回 (2019年6月8日)

1. 進行：小林基起

① 「インドネシアでの日本語教育活動」

発表者：馬場葉子 (元 JICA 青年海外協力隊 インドネシア 日本語教育)

② 「ベトナムにおける日本語教育を考える」

発表者：浅野鉄也 (元 JICA シニアボランティア ベトナム 日本語教育)

2. 進行：吉田一彦

「中国語話者上級日本語学習者のライティングに対する 日本人大学生の評価の課題」

発表者：余文龍 (京都大学大学院生)

令和元年度第2回 (2019年10月19日)

1. 進行：近藤正憲

「サハリン州における日本語教育の勃興と継続の経緯」

発表者：竹口智之 (関西大学)

2. 進行：三原龍志

「『やさしい日本語』を海外の日本語教育現場に」

ファシリテーター：近藤正憲

『海外日本語教育研究』 投稿規定・執筆要領

投稿規定

1. 投稿：

投稿は本学会の会員に限ります。共著論文の場合は筆頭者が会員である必要があります。投稿を希望される方は、学会ホームページ上にある投稿申し込みの受け付けフォームからご送信ください。投稿申し込みの受け付け期間内に論文題目を届け出た方に、編集委員会から投稿承認の通知とともに論文のひな形を送付いたします。本誌は年2回刊で、投稿のスケジュールは以下のとおりです。

<上半期号> 投稿申し込みの受け付け締め切り：2月末日 23：59（日本時間）まで。

投稿締め切り：4月10日 23：59（日本時間）まで。6月刊行予定です。

<下半期号> 投稿申し込みの受け付け締め切り：8月末日 23：59（日本時間）まで。

投稿締め切り：10月10日 23：59（日本時間）まで。12月刊行予定です。

2. 内容：

海外の日本語教育関連分野の「教育方法」「カリキュラムデザイン」「教材」「評価」「言語習得」「教育史」「言語（教育）政策」等に関する研究論文で、未発表のものに限ります。他学会誌等との二重投稿は受け付けられません。

3. 使用言語：日本語を原則とします。

4. 原稿料：お支払いしません。

5. 審査：

投稿原稿は、査読委員の審査を受け、その結果を編集委員会が取りまとめ、投稿者にお知らせします。審査結果は「採択」「条件付き採択」「次号以降への再投稿」「不採択」の4つで、「条件付き採択」の場合は、所定の期間内に修正を加え、査読委員の確認を経て、当該号に論文が掲載されます。

6. 発行：

本誌に掲載される論文はオンラインジャーナル、ならびに冊子体で公表されます。また、テーマ別や国別などで再編集して発行する場合があります。

7. 原稿送付先、および投稿に関してのお問い合わせ先：

投稿はE-mailでのみ受け付けます。また、投稿の方法に関するお問い合わせは以下の連絡先で常に応じます。本誌への投稿を予定し、研究トピックについてご相談のある方は、十分な時間的余裕を持ったうえで、各号の投稿申し込みの受け付け期間以前に、編集委員会までご連絡ください。投稿受け付けの締め切りが近づきますと、次の号への投稿をお願いする場合があります。

E-mail kgnk.info@gmail.com (学会誌編集委員会)

執筆要領

1. 投稿原稿の構成：

投稿原稿は、次の要素から構成されるものとします。この順序で書いてください。

- 1) タイトル（副題をつけることも可能）
- 2) 要旨（日本語 400 字以内）
- 3) キーワード（原稿中の主要名詞句 20 字以内を 5 つまで）
- 4) 目次（見出しを 2 段配列で）
- 5) 本文（図表を含む）
 - ①章・節・項構成は 3 階層までとします。
 - ②注は、脚注とします。
- 6) 参考文献一覧
- 7) 著者紹介

2. 投稿原稿の書式・分量：

- 1) 分量は資料等を含め 18 ページ以内で横書き。
- 2) 1 ページは A4 版横書き 43 字×33 行。
- 3) 本文は明朝体、タイトルと見出しはゴシック体、欧文（英文字の略語も含む）は半角文字を使用し、欧文の書体は century。
- 4) 接続詞および接続詞に類するものは、原則としてかな表記。
例)「従って→したがって／例えば→たとえば」など。
- 5) 補助動詞はなるべくかな表記。
例)「～してみる。／～していく。」など。
- 6) カタカナは全角入力。
- 7) 数字はすべて半角で、算用数字を使用。
- 8) 数、時間、順番を表すときは、1 人、2 つ、3 時、4 回、5 位、10 日など、算用数字を使用。1000 以上の数字は 3 ケタごとに「, (カンマ)」を入れてください。
例)「1,000／189,125」など。ただし、年号表記（原則として西暦）は、「1998 年／2002 年」などとカンマなし。
- 9) マル数字の使用は可能です。
- 10) 「！」や「？」「／」「- (ハイフン)」「“ ”」、括弧類は全角。
 - 11) 「！」「？」の後ろは全角アキ。
 - 12) 句読点は「,」「。」で統一。
 - 13) ルビは、原則なし。
- 14) 図表・イラストを引用、転載する場合は、投稿者があらかじめ著作権者から転載の許可を得ておいてください。また転載する際は、原本の著者名、出版年、転載箇所頁も明記してください。図のキャプションは下部に中央揃えとし、表のキャプションは上部に中

央揃えとします。

- 1 5) テキストから長文の引用をする場合は、改行し全体を2字分下げてください。ルビや表記は、オリジナルに従うことを原則としますが、読みやすさを考慮して変更も可能です(変更して引用する場合は、事前に許可を得ておいてください)。直接引用の場合には、引用箇所の該当頁数を明記してください。

出典は以下の要領で表記してください。

著者名・出版年、『書名』・出版社名、または「論文題目」・『雑誌名』・該当頁

- 例) 佐久間勝彦 (2006) 「海外に学ぶ日本語教育 - 日本語学習の多様性 -」 国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈 - 学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性 -』アルク, 33-65

高嶋幸太・関かおる (2014) 『その日本語、どこがおかしい? : 日本語教師のための文型指導法ガイドブック』国際語学社

吉田一彦 (2001) 「埋め込み文をともなう形式「～とき」の名詞句性と時間関係を標示する動詞述語形式-teiru/teita の交替」『横浜国立大学留学生センター紀要』8, 19-64
そのままの引用ではなく、少し変更を加えている場合も、上の要領で「……を利用」という形で注に出典を入れてください。

URL の場合は、サイト名・<URL>および参照した年月日を明記してください。

- 例) 日本語教材<<http://www.kaigainihongokyouiku.co.jp>> (2005年10月2日)

3. 参考文献について :

- 1) 言語別に分けて、著者の名字をアルファベット順で全部並べてください。

- 2) 欧文文献に関して

①書名(副題も含む)は斜体。

②副題はコロンのあと。

③以下の順で、例のように記入してください。

著者名・出版年、書名・都市名 : 出版社名、または論文題目・雑誌名・該当頁

- 例) Sapir, E. (1921). *Language: An introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace & company.

- 3) 和文文献については、前記引用の箇所を参照してください。

- 4) 共著の場合、和文文献は「・(中黒)」で、欧文文献は「,(カンマ)」でつないでください。

*原稿の体裁や表記法が執筆要領と異なる場合、受理されない可能性がありますので、ご注意ください。

4. 著者紹介について：

氏名（ふりがな付き）と、主な海外教授活動情報を最大5つまで掲載できます。ただし、固有名が特定されないよう、教育機関の種類や特徴のみを明示することとします。

表記例：

【主な海外教授活動の場】

トンガ・政府中等教育機関	2000.12～2002.06
マレーシア・民間語学学校	2004.06～2008.02
タンザニア・政府高等教育機関	2009.08～2010.07

以上

編集後記

研究例会での発表も常時募集中です。みなさまからの新たな知見を心待ちにしております。(内山)

引き続き、質の高い学会誌をご提供できるよう尽力してまいります。(高嶋)

今号は投稿された数が過去最高、論文として掲載となった数が最低のゼロという、まったくもって皮肉な結果となりました。このことを、一般読者の皆さん、会員の皆さんとともにしっかりと受け止めたいと思います。教育と研究における日々の努力の成果を多くの人の知るところとし、十分な批判・検討を行い、最終的に知として共有されるべきものとする、そんな学会誌の社会的機能の原点に立ち戻って考え直したいです。そして、新たな日々の努力が投稿のかたちで寄せられることを、ひたすら待ちたいと思います。(吉田)

最後に、今号における論文の投稿状況を報告します。投稿申し込みが16本、そのうち締め切りまでに投稿された論文が12本でしたが、査読を通り掲載に至った論文はありませんでした。(内山・高嶋・吉田)

	海外日本語教育研究 第9号
発行日	2019年12月31日
発行	海外日本語教育学会
編集	海外日本語教育学会 学会誌編集委員会
表紙デザイン	鶴澤威夫
本文デザイン	高嶋幸太
編集協力	蟻末淳
HP	http://kg-nk.jimdo.com/
Facebook	https://www.facebook.com/KaigaiNihongoKyouikuGakkai

海外日本語教育学会